

始発列車

ガタンゴトン……ガタンゴトン……ガタン……ゴトン……。午前五時十分、定刻どおりに始発列車は到着した。

私がこの駅に来たのは十五年前。あの日以来、私はこの駅でずっと働いている。昔は都会の駅で働いていたが、無表情で往来する人々に嫌気が差し、異動願いを提出した。

異動先は小さな田舎町の駅。通勤時間でも人がまばらな、寂れた路線である。しかし、だからこそ、私はこの駅で、様々な人の思いを感じる事が出来た。特に始発列車では、忘れられない思い出がある。

あれは十年前の春先のこと。私が朝の日課の駅の掃除を終えたとき、大きめのバックを持った女の人が現れた。彼女は終点までの切符を一枚買った。

彼女は駅のホームに立ち、列車の来る方向を見つめていた。その姿はいたって落ち着いていたが、どこか寂しげで、だけど何か待ち焦がれているような、そんな表情だった。

なぜ彼女が始発列車で出かけるのか、その理由は分からない。しかし、一つだけ、彼女を見て思った。

きっと彼女は二度と、この駅に戻ってこないだろう。なんとなく、彼女の表情が、私にそう思わせた。

午前五時九分、始発列車が到着した。彼女の前で、ドアが開いた。彼女は列車に乗り込もうと一歩踏み出したが、不意にゆっくりと振り返った。私は彼女の瞳を見た。その瞳は確かに何かを見つめていたが、それはそこにいて欲しかった誰かを見ていたのか、それとも生まれ育った故郷を見ていたのか、私には分からなかった。だけど、少し寂しそうな、そんな瞳だった。

彼女は小さくため息をついて、電車に乗りうとしたそのとき、私は彼女と目が合った。私は小さく、少しでも出来るだけ優しく、微笑んだ。彼女はちよつと驚いた表情をしたが、彼女もまた、私に向かって微笑んだ。

そして、列車の中へと消えていった。

始発列車が動き出す。新しく旅立つ人を乗せて。私は列車が見えなくなるまで見送った。旅立つ人の、唯一の見送りとして。

夏がまだ明けきっていない五年前の秋。始発列車が到着する少し前に、スーツ姿の男の人が現れた。彼はいつもなら七時半の列車で出かけている。おそらく仕事の都合だろう、彼はいつもどおりの、ふもとの街への定期券を出した。

彼は駅のホームのベンチに深く腰掛け、鞆を横に置いた。それからじっと自分の手を見つめ、そして大きく、深いため息をついた。

午前五時十一分、始発列車が到着した。しかし、ドアが開いても彼は立ち上がらない。まだ、自分の手を見つめている。

いや、違う。そのとき私はようやく気が付いた。彼が見つめているのは手ではない。彼の指、左手の薬指にはめられている、結婚指輪。

そうか、彼は今、つらいのだろう。だけど、自分には家族が、守るべき人がいることを忘れないために、じっとその証を見つめているのだ。

彼は少し微笑みながら、短く息を吐くと、重い腰をゆっくりと持ち上げ、列車に向かって歩き出した。その途中、私は彼と目が合った。私は小さく微笑み、軽く頭を下げた。彼は疲れた表情であつたが、何とか笑顔を作り、彼もまた軽く頭を下げた。そして、列車の中へと消えていった。

始発列車が動き出す。守る決心をした人を乗せて。私は列車に向かって一礼した。守る決心をした人に、敬意を表して。

始発列車には、特別な思いを持った人が乗りに来る。都会では気づかなかった人の思いを、私は今、感じている。その思いに、私はもつと触れてみたい。だから今日も、私は始発列車に合図を送る。

僕は、今現在、とある駅の駅員をしている。とある駅といっても関東で二番目に利用客の多い駅である。駅員をしていると毎日いろいろな種類の人をみるのである。特に年末になるとなんともいえない虚無感を抱えた人を目にしたりする。一般人には興味はないがその人たちには興味がある。

駅員の仕事の中で一番大切な仕事は、電車の進行先に飛びこみ自殺する人を見つけて、その自殺を阻止することだ。それは電車の発着のアナウンスや満員時に客を電車の中に詰め込むことなどよりずっと大切な仕事なのだ。一人阻止することに会社から十万円支給され、昇進にも影響する。だから、僕は毎日、ちようど目の前で自殺しそうな人に遭遇することを第一に考えて仕事をしている。そして最近、その遭遇するコツみたいなのがわかってきた。

まず第一に、場所であるが、ホームの真ん中に集中している。飛び込む場所がホームの前すぎるとタイミングをはかりづらく、かつ死ぬとき痛すぎる。また、後ろすぎると電車からのプッシュが弱くて死ぬとき綺麗に肉が飛び散らないからだ。また、時間帯は朝だ。朝のうちに死んどきたいのだろう。こういうコツを身につけて僕は今月、三人を阻止した。

しかし、そうした自殺未遂者をみて疑問に思うことは、なぜ人は電車に飛び込むのかということだ。体の原型を保つことができないしなにしろ人に迷惑がかかる。しかし自殺者を見ると電車に吸い込まれていくようにいい感じに飛び込んでいく。最近の僕はそんなことばかり疑問に思っている。

その日もそのようなことばかり考えてる日だった。昼の3時だった。ホームに電車が入ってくる音がした。ホーム下のレールをぼんやり眺めていると突然絶望感に包まれた。するとさっきまで見ていた空間がうつすら明るく見え、そこから気持ちのいい引力を感じた。気持ちいい！快感！もつとその引力を感じたいと思い足が前に進み、体が前のめりになった。そのときだった。後ろから同僚に手を掴まれ後ろに引つ張られた。

その日の夜、後ろから僕の手を引いた同僚にキャバクラに誘われた。興味があったのでついて行くと店の女の子は可愛く、お酒もおいしく素敵な夜となった。そろそろ帰ろうかと同僚に言われ、勘定をどうしようかと聞くと、同僚が今日は全部自分が払うと言う。なんで？悪いよと主張すると、同僚は言った。

「今日のお前のおかげで十万円入るんだよ。」僕と同僚は爆笑した。

1 せきこみし 3位 9翻

意表を衝いた猫あらためタワシあらため今週の表紙さん。
日本語のうつくしさと人生の儚さを感じさせて出発進行！
席が混んで咳き込んで、えきが駅で液で涙で、「ながれゆくえき」が「流行病」なんて神ワザです。新境地へGO！
イチオシフレーズ：「せきこみし、ながれゆくえき」

2 僕の途中駅 君の最寄り駅 6位 4駅

そして途中駅へ。
タイトルのフレーズがほんとにきれいで、つぶやきのような僕の語りにずっと心が寄り添ってゆきます。
冬の陽だまりのような、ほんとステーション。なのにストーリー作品だなんて……

3 駅鈴をさずける者達 8位 3駅

一転、エジプトへ。
前半のグロテスクな描写はちょっとパス……の気分だったのですが、駅鈴でまとめた最終段落での「終着駅だけど、始発駅」というセリフがぐっと胸に迫ってきます。
神々の名前、小道具の数々。緻密に組み上げられた物語世界に、ファラオの墓に迷い込んだように浸れました。職人芸！
イチオシフレーズ：「とろとろ、とろとろと出てくる茶と朱のマーブル状の液体」

4 ユキガフルホド 1位 14倍役満

ホワイトラヴ。純愛をたっぷりと粉砂糖仕様で。どのくらいの遠い距離なのか書かれていないのが、より想像を誘います。宇宙ステーションでも行けそうな、時空を超えた普遍の愛ががメイドさんを振り切ったの首位でした。おめでとう!!!

5 易 10位 0駅

謎です。麻雀と思わせて易者さんだった？ ということのようですが。でも、分かるかたがたにはツボだったようで。
イチオシフレーズ：「台詞はご想像にお任せします」「赤い点が一個ついた棒を一本」

6 赤い大地 9位 1駅

麻痺してゆく日常感覚。ラスト2行「老人に死体を見るのと同じ視線を向けている自分」のくだりで、そのコンセプトがぐさりと伝わってきます。

正義感や使命感といったキレイゴトが日に日にすり減らされてゆくつらさが、あざやかに映し出されて、重い読後感。

2段組の嵐だった今回、このコンパクトな描写のワザはぜひみなさま赤ずきんちゃんから盗んでくださいませ。

7 あの日のlove letter 5位 6駅

Ohびっくり。うちくコラムニストさん、どうやらホントに変身中のもようです。

「地元の工場」と昭和（戦前？）を連想させながら「遠くの大学」と時代イメージをしばらくきれない感がありましたが、渡せなかった手紙、渡せなかった思い、ていねいにクローズアップして、しっかり追体験させていただきました。

しかし「無常」→「無情」では？

8 葛藤 6位 4駅

「呵責」の使い方が間違ってる気がするのと、お題を意識して「益」を連呼しすぎかな、と気になったのはそれくらい。

最終電車のやるせなさ。できごとと良心の呵責と満月。くっきり見せて、自分だったら？ という思いに読者を誘っていただきました。

9 メイドカメイド 2位 10翻

最強！ 作者さんは聖地歴17年とか。ハンパじゃない年期の入り方です。作品は解説不要のわかりやすさで、話題独占、三賞独占、そして2位、**おめでとう!!**

イチオシフレーズ：「メイドカメイド」「いらっしゃいませ、ご主人様」「二次元専門なので」「※この文章はフィクションであり（略）」で、イチオシフレーズ大賞もゲットです。

10 題名を入れるスキマがなかった 3位 9翻

と作品のウラにありましたので。

途切れた線路から広がる、つかのまの鮮やかな夢人生。終着駅が始発駅、というコンセプトは3番のエジプト作品にもつながりそうです。

「大人にならなかった」と明かすラスト1行がよくわからないところが、またよけいに想像を誘いますが、でもよくわからない。。。。

惜しい1 始発列車

駅という空間だからこそ、つかのま切り取られる人生の一場面。始発列車にしばって2つの人生を見せて余情ゆたか。特に「守る決心をした人に、敬意」というくだりが好きでした。

本選入りのグレードなのですが、まさか本選にこれ以上2段組作品を増やすわけにも行かず・・・TAさんの判断だったようです。

惜しい2 ぽっぽや

ラストは明るい駅員さんの日常。

10まんえん支給なんて、あるわけないだろーと思いつつ、ユニークな設定に引き込まれ、わははと楽しめました。おだいに。

☆祝 今週の受賞作品☆

班名	賞タイトル	作品番号
▽	赤賞	6
BTB溶エキ	往生際が悪いで賞	9
C++	あなたヲタクで賞?	9
D	松尾芭賞	1
Eki	今週の入場券	7
f(x)	残念賞	5
$g=9.8\text{m/s}^2$	痛いで賞	2
東工大	第2回綾田賞	5
Immoral	勇気があるで賞	9
損保Ja班。だ	短歌だけど松尾芭賞	1